

# 病害虫発生予察特殊報第2号

平成13年12月4日  
三重県病害虫防除所

本県において、トマトハモグリバエが初確認されたので特殊報として発表する。

- 1 害虫名 トマトハモグリバエ
- 2 発生確認作物名 トマト、キュウリ
- 3 発生確認地域 木曾岬町及び嬉野町

## 4 発生確認の経過

嬉野町のキュウリ栽培施設で本年9月に、また木曾岬町のトマト栽培施設で11月にハモグリバエの被害が見られたため、その幼虫を飼育し、羽化させて同定したところ、トマトハモグリバエであると確認した。

本種は最近になって日本に侵入した中南米原産の害虫で、平成11年4月に沖縄県のトマトから最初に採取された。その年の8月には山口県と京都府でも確認され、その後西日本を中心に発生地域が拡大し（10月以降には関東圏の3都県でも発生が確認されている）、現在20都府県で発生が確認されている。本県で発生を確認したのは初めてである。

## 5 トマトハモグリバエについて

### <形態>

成虫は体長が1.3mm～2.3mmで、翅長が1.2mm～1.7mm。体色は光沢のある黒色で部分的に黄色。翅は透明で、脚は黄色、頭部の外頭頂剛毛の着生部の体色が黒色である。本種の体長、体色はマメハモグリバエやナスハモグリバエと酷似しているが、この2種の頭部の外頭頂剛毛の着生部の体色は黄色であるという点で違いが見られる。

幼虫は体長3mm以下の淡黄色のウジ虫状で、蛹は黄褐色の俵型で体長が1.3mm～2.3mmである。

### <生態>

卵は雌成虫が産卵管で葉に開けた穴の内側に産みつけられる。孵化した幼虫は葉肉内を食害しながら潜行し、発育すると葉の外に出て地表に落下し、土中で蛹化する。幼虫による葉の絵描き症状や蛹化の方法はマメハモグリバエと酷似し、識別は困難である。

卵から成虫になるまでの期間は、気温20℃で約27日、25℃で約18日、30℃で約14日である。発育零点は9.6℃とされている。

### <寄主植物>

マメハモグリバエと同様、ウリ科、ナス科、マメ科、アブラナ科、キク科等きわめて多くの植物に寄生する。国内で寄主として確認された主な植物は以下のとおりである。

ウリ科：キュウリ、メロン、カボチャ、スイカ、ヘチマ、シロウリ、マクワウリ

ナス科：トマト、ナス、ジャガイモ、トウガラシ、

マメ科：ダイズ、アズキ、インゲン、ソラマメ、ササゲ

アブラナ科：ハクサイ、ダイコン、キャベツ、カブ、コマツナ、ブロッコリー、ミブナ

キク科：ゴボウ、シュンギク、マリーゴールド、アスター、キンセンカ、ダリア、ヒャクニチソウ

### <被害>

幼虫が葉肉内を食害潜行し、絵描き状の被害を発生させる。キュウリ、トマトでは上位葉にまで幼虫の潜孔がみられ、寄生が著しい場合には葉が白化する。またこれまでマメハモグリバエではあまり問題にならなかったウリ科作物で多く発生する傾向があるとされている。

## 6 防除対策

### <耕種的防除>

ハモグリバエが寄生していない苗を確保し、発生源を圃場に持ち込まないようにする。

圃場及び圃場周辺の雑草にも寄主となる植物があるので、圃場周辺の除草に努める。

卵や幼虫が寄生した植物残渣は、本虫の発生源になるため、土中に埋めるか、ビニールシート等で被覆して虫を死滅させるなど、適切に処分する。

発生施設では、次作の発生を防止するため、収穫終了後施設を密閉して蒸し込み処理を行うことも有効である。また施設の開口部に防虫ネット（1mm目合い以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。